



薬学部 教授
西 剛秀

定年退職にあたって

2019年4月から本学薬学部の創薬化学講座に赴任してから、あっという間の4年間でした。この間お世話になりました学長、副学長をはじめ、教職員の皆様、本学関係者の皆様、学生の皆様には、心より厚く御礼申し上げます。

この4年間を振り返ると、最初の1年日は講義資料の準備等に追われ、職場に慣れることで精一杯でした。2年目からはようやく大学での生活にも慣れ、本格的に研究も開始することができましたが、新型コロナウイルスの感染拡大があり、オンラインでの講義や分散登校など、学生との人的交流が疎遠だったのは残念だった気がします。また、懇親会や新年会、忘年会もほとんどなかった3年間でしたので、大学関係者の皆様と飲み会を通じて仕事以外のお話があまりできなかったことも心残りです。

1980年に北海道大学薬学部の伴義雄教授が主宰されていた薬品製造学講座に4年生の卒業研究で配属となり、有機合成化学の世界に足を踏み入れ、修士課程修了後に三共(株)(現・第一三共(株))の化学研究所に入社し、2019年から2023年の北海道医療大学勤務まで延べ43年間、全く途切れることなく有機合成化学の現場で過ごし、大病も

せずに健康で定年を迎えられることは、この上もない喜びであります。思い返せば、多くの良き先輩、後輩、同僚、友人や家族に支えられてきた43年間で、本当に素晴らしい方々と出会い、恵まれた環境で楽しく研究生を送ることができました。

日本は世界で第3位の新薬創出国ですが、医薬品の輸出入額は2015年から連続2兆円超の貿易赤字が続いています。また科学分野での国別Top10%補正論文数も2000年までの第4位から今や12位にまで後退しており、科学技術立国としての地位がどんどん低下しています。新薬を創出するためには、優れた人材の育成が不可欠で、大学もその責任の一端を担っている重要な教育機関だと思います。北海道医療大学に赴任してからわずか4年間ではありますが、学生のモラルや学力の低下をはじめ、研究者としての人材育成が十分に出来ていない薬学部6年制の弊害というも肌で感じ、日本の将来、北海道医療大学の未来に不安を感じたのも事実です。

4年間の皆様方のご厚情に感謝するとともに、北海道医療大学のレベル向上と発展を祈念致します。有難うございました。



歯学部 教授
川上 智史

歯学部教授退任にあたって

令和5年3月末をもって歯学部教授を退任いたします。思い起こせば、昭和59年3月本学歯学部(1期生)を卒業、直ちに歯学部歯科保存学第2講座(現在の歯制御治療学分野)に助手として入職以来、39年間教育・臨床・研究に従事させていただきました。学生時代を含めると人生の2/3以上を本学とともに歩んできました。昭和59年当時は、大学病院で数年研修を受けて、開業医に勤務、その後故郷に戻って開業かなあぐらの漠然とした将来像を描いていたと思います。それがなぜこんなに長く教員生活を送ることとなったかを考えてみると教員として、歯科医師として、尊敬でき、目標となる恩師との出会いがあったからだと思います。その出会いは、教員になって2年目の秋、昭和60年9月のことです。

北海道大学の助教から当講座に教授として赴任された松田浩一先生との出会いでした。この出会いが私の人生を大きく変えることとなりました。まだその頃は、学習者が主役の歯科医学教育の考え方や他職種

(現在では多職種)と連携した歯科医療の提供といったことが定着どころか、あまり考えられていない時代でした。松田先生は、いち早くこれらの考え方や手法を本学に取り入れ実践へと進められました。それを間近で見て聴いて経験させていただいたことが、今日までの教員人生に多大な影響を与えています。松田浩一先生は、平成15年1月18日に急逝されましたが、先生の教えを心のよどころとして教育・臨床・研究に励んできました。素晴らしい恩師の教えを胸に刻んで今日まで微力ではありますが、医療人教育に貢献できたのではないかと考えています。医療系総合大学である本学、母校で教員生活を終えることができることはこの上もない幸せと心から感謝しております。本当にありがとうございました。

最後に、医療・介護・福祉の分野で多くの卒業生が活躍している姿をみることは、教員冥利に尽きることです。本学の益々のご発展を祈念いたします。



心理科学部 教授
中野 倫仁

心理科学部の開設から21年

2000年9月8日に当時の土産田常務理事、高橋憲男教授から医療大に新しい学部を作り、心理職の国家資格者を養成するので赴任して欲しいとの要請があった。精神科臨床において質の高い心理療法の必要性を痛感していたこともあり、2002年4月新設の心理科学部教授として札幌医大神経精神科より異動した。当時は心理職の国家資格化は数年以内に実現すると聞いていた。

あいの里キャンパスで臨床心理学科と言語聴覚療法学科の2学科体制で発足したが、臨床心理学科の医師教員は1人であったこともあり、関係する講義が多く、講義前日は夜中の12時まで準備することが多かった。札幌医大の外来は継続し、本学の大学院生の論文のデータを取らせてもらっていた。専門分野を拡大したかったが、老年精神医学分野以外から声がかからず、職場のメンタルヘルスが辛うじて加わった。老年期に関心を持つ学生・院生は必ずしも多くはなかったが、その後活躍している卒業生を見ると少しは貢献できたと思っている。

2012年に学部長になり、あいの里から当別キャンパスへの学部移転の話が出てきた。結局2015年から2019年にかかる学年進行の移転とな

り、言語聴覚療法学科はリハビリテーション科学部に移った。大学院の相談業務はあいの里に残ったため、教員には教育・研究に多大の負担をお願いしていることは申し訳ないと思っている。移転時から臨床心理学科が定員割れとなったのは残念なことだった。

明るい話として2018年から国家資格(公認心理師)が発足することになり、学部と大学院のカリキュラムを改正し、最終的に2022年で完成を迎えた。OB・OGを対象にした公認心理師試験対策講座を2年間実施し、その内容の高さはいささか自負している。公認心理師試験の合格率も本学は好調であり関係者の努力に敬意を表したい。

2020年で学部長を退任した後は、もう一度研究に力を入れたいと思っていたが、コロナ禍で思いはかなわなかった。

結果的に21年間在職することになり、多くの教職員の方々にはこの間大変お世話になりました。学部教員も学内外から広く集まり、その中に卒業・修了生も加わって、後輩の指導を担っていることはうれしい限りです。最後に医療分野に強い臨床心理学の北の拠点として本学の更なる発展を祈っております。



歯学部 教授
遠藤 一彦

北海道医療大学の益々の発展を願って

月日の経つのは早いもので、昭和62年4月に本学歯学部にて講師として着任してから36年が経過し、本年3月に定年を迎えることになりました。36年間の教員生活を振り返ってみますと、何度も困難に直面したこともありましたが、多くの教員や職員の皆様を支えられ、何とか定年まで健康で教育と研究を続けることができました。共に仕事をさせていただいた生体材料工学分野の同僚をはじめ歯学部教員の皆様、関係した教職員の皆様に心から御礼申し上げます。

私が本学に着任した当時は、薬学部と歯学部の2学部しかありませんでした。現在では6学部9学科を擁する医療系総合大学に発展しています。当別キャンパス内には健康科学研究所、20周年記念会館、中央講義棟などが次々と建造され、新医療人育成の北の拠点に相応しい大学となっています。

本学は間もなく創立50周年を迎えますが、未だに当別キャンパス周辺にはJRの駅くらいしか大きな建造物はなく、大学は森と田圃に囲まれ

た佇まいのままです。通学や通勤には大変不便ですが、私はこの自然豊かなキャンパスが気に入っています。春にはわたなべ山に咲き誇るカタクリやエゾエンゴサクなどの可憐な花々、初夏には日中のゼミ、夜のカエルの大合唱、秋の夜にはキリギリスやコーロギなどの小さな虫たちが奏でる音楽を楽しむことができます。特に秋の夜遅く、駐車場周辺の草むらで開催される星空演奏会では、様々な虫たちが美しい声を競うかのように響かせ、指揮者もいないのにそれらが自然に調和し、まるで室内楽のしらべのように聞こえてきます。秋の虫たちから進る生命の証は、どのような楽器の音色よりも私の心に響いてきます。

大学は学生、教員、職員で構成されています。三者が三位一体となり、この自然に恵まれた素晴らしいキャンパスで、地域医療への貢献と国際社会での活躍を目指して精力的に活動することにより、北海道医療大学が夜空に燦然と輝く星の光に導かれるように発展し続けることを願っています。

以上の諸先生の他、
薬学部 青木隆 教授、堀田清 准教授、千葉智子 講師、
歯学部 塚越慎 講師、
看護福祉学部 西基 教授、大友芳恵 教授が定年を迎えられます。
ありがとうございました。

With heartfelt thanks.



薬学部 教授
青木 隆



薬学部 准教授
堀田 清



薬学部 講師
千葉 智子



歯学部 講師
塚越 慎



看護福祉学部 教授
西 基



看護福祉学部 教授
大友 芳恵

新任教員 紹介

新任教員

令和4年9月12日付

心理学部 助教 上河邊 力
(臨床心理学科)

令和4年10月1日付

歯学部 任期制助手 江端 一馬
(口腔機能修復・再建学系(歯周歯内治療学))

2022年度 理事長表彰について

2022年度の理事長表彰式が、当別キャンパスにおいて1月6日(金)に執り行われ、鈴木理事長より表彰状が授与されました。理事長表彰は、特に表彰の価値があると認められた方を対象に授与するもので2022年度は以下の方が表彰されました。

笠師 久美子 < 薬学部・特任教授 >

2021年に開催された東京オリンピック・パラリンピックにおいて選手村総合診療所のチーフファーマシストの重責を務められ、その際にボランティアとして活躍した薬剤師への調査結果をまとめた論文(筆頭著者)が、英国の権威ある学術雑誌である「British Journal of Sports Medicine」に掲載された。

